



Title	森鷗外訳の翻訳流儀：「玉を懷いて罪あり」を手掛かりに
Author(s)	中，直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2025, 2024, p. 11-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森鷗外訳の翻訳流儀

—「玉を懷いて罪あり」を手掛かりに—

中 直一

1 はじめに

森鷗外の初期翻訳作品である「玉を懷いて罪あり」は、同時期の鷗外の翻訳作品の中にあつて、とりわけ自由な翻訳ぶりが目立つ。この翻訳については、筆者自身、かつて論じたことがあるが¹、その論文執筆当時は、鷗外が翻訳底本に使用したドイツ語原文（鷗外文庫所蔵本）を入手出来ず、また 1889(明治 22)年の『讀賣新聞』に掲載された初出も未見であつた。今回、その両者を入手することが出来、改めて「玉を懷いて罪あり」の原文と鷗外訳、そしてその初出を検討する機会を得た。

前論文でも述べたように、「玉を懷いて罪あり」は、原文のかかなりの部分を省略し、あるいは要約した形のものであり、翻訳とも抄訳とも言える独特の作品になっている。そして、単に短く切り詰めたのみならず、所どころ原作にない鷗外独自の描写が加えられ、時として鷗外自身の所感の如きものが差し挟まれる場合さえあつた²。

大幅な省略・要約の合間に、原文にない付加がしばしば見られるという、独特の翻訳作品である「玉を懷いて罪あり」について、その付加と思しき部分を見ると、純然たる鷗外の創作的付加の他に、一見鷗外の創作に見えて、実は原作で後ろの方に記されている記述を鷗外が訳文の中で先取りして、前の部分に取り込んで訳しているものが散見される。

なぜ、このようなことが生じるのか。その理由を解明すれば、鷗外の翻訳流儀が垣間見えるのではないか。本論文は、先取り翻訳とも言える翻訳流儀のよって来る所以を解明することを以て任とするものである。あらかじめ結論めいたものを述べるならば、鷗外は、一字一句を原文と照らし合わせて訳す、という翻訳手法を取らず、むしろ原文の数行（時に数十行）をまとめて通読（かつ速読）し、その内容を記憶に留めた上で、原文の諸々の要素を再構成して、それを訳文に反映せしめたのではないか、と思われるのである。

そして、こうした「まとめ読み」「斜め読み」と記憶による翻訳流儀を鷗外が採用したと仮定すれば、「玉を懷いて罪あり」に見られる奇妙な「誤訳」（つまり、誤訳しそうにない所に現れる原文との乖離）についても、その理由が解明出来るのではないか。

本論文では、まず鷗外の「まとめ読み翻訳」とも言える実態を示し、次いで誤訳と思しき箇所をの解説を行う。

2 描写の先取り

「玉を懷いて罪あり」は、ドイツの作家 E.T.A. ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822) の *Das Fräulein von Scuderi*「マドモアゼル・ドゥ・スキュデリ」を訳したものである³。舞台は十七世紀ルイ十四世治下のフランスで、当時世間を騒がせていた路上連続宝石強盗殺人事件を取り上げている。主人公スキュデリはルイ十四世の宮廷に出入りする高名な女性詩人・作家で、国王からの信任あつく、また王の愛妃であるマントノン侯爵夫人からも尊重されている。そのようなスキュデリの館に、ある夜、見も知らぬ男が押し入り、応対に出た小間使いの女性に謎の小箱を押し付けるように渡して立ち去る。翌朝、その小箱をスキュデリが開けてみると、中には宝石をあしらった見事な装飾品がはいっていた。

¹ 拙論「森鷗外『玉を懷いて罪あり』における翻訳技法」(大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 言語文化の比較研究』2003 年 4 月)。

² 一例を挙げれば、上掲拙論 p.46 で論じたように、鷗外は全く原文にない「嗚呼、公衆と云ふものは果敢ないものだ。デグレエが来て人殺だと云へば、オリキエに石を投げ掛け兼ねぬ様な勢であつたが、今又た女學士が娘を不便だと云ふと、今まで面白がつて見て居つた残酷な所作を何となく悪む心が生じ、涙をも溢ぼすものだ。此性質は何處の國でも、今も昔もかはらぬ」という、一般大衆の移ろいやすい正義感を嘆く文言を訳文の中に盛り込んでいる。

³ ドイツ語原題について、岩波版全集後記には *Fräulein Scudery* と記されているが、これは鷗外手沢本の表記とは異なる。

謎の小箱を開けた場面の鷗外訳は、次のようになっている。

筐から出たのは金銀珠玉で惜氣もなく飾った首飾と腕環とで手に持ったとき、窓から指しこんだ旭の光で、燦爛と光を發つた。 (pp. 109-110) ⁴

上記引用文で点線アンダーラインを引いた部分⁵が、鷗外の訳文にのみ見られる文言である。つまり、翻訳底本では、小箱を開けると宝石がきらりと光る場面はあるものの、それが朝日に照らされたからというようなシーンではない。念の為、当該部分の原文と現代訳を以下に掲げる。(引用文中の原文 *das Fräulein*、現代訳「マドモワゼル」は、主人公スキュデリを指す。)

原文：Wie erstaunte das Fräulein, als ihr aus dem Kästchen ein Paar goldene, reich mit Juwelen besetzte Armbänder und eben ein solcher Halsschmuck entgegen funkelten. (S.114)⁶

現代訳：函からぴかりと煌いて眼を射たのは、ふんだんに宝石を ^{ちりば} 鑲めた金のブレスレット一對、それと似かよったネックレス、これを見てマドモワゼルのいかに驚いたことか。(p. 304)⁷

ドイツ語原文には、宝石をあしらったブレスレットと腕輪が光を放った (*funkelten*) と記されるのみである。朝日云々の記述はない。筆者は原文と鷗外訳を対比した当初、朝日云々の記述を鷗外訳に発見して、これは訳者鷗外がいわば翻訳家としての分限をついつい越えて、作家的な創作衝動にかられ、朝日に映える宝石を描写した文言を訳文の中に盛り込んでしまったのではないかと推測した。

だが、この箇所から少し進んだ所で、原文では再度宝石箱のシーンがあり、その部分で、カーテンの間から朝日が射しこんで宝石がきらりと光る、という場面がある。その部分の原文と現代訳を掲げる。

原文：Die Sonne schien hell durch die Fenstergardinen von hochrother Seide, und so kam es, daß die Brillanten, welche auf dem Tische neben dem offenen Kästchen lagen, in rötlichem Schimmer aufblitzten. (S.115)

現代訳：太陽が、このとき、窓を覆っていた深紅の絹のカーテンを通して明るい光を送りこんできたので、テーブルの上に置かれて蓋のあいていた小函のなかにいくつもおさまっていたダイヤモンドが、赤味を帯びた光をきらきらと放ったものである (p. 306)

原作では宝石がきらめく場面が二度あり、一度目は小箱を開けた時、そして二度目は朝日が射しこんできた時である。鷗外訳では、二度目の部分は訳されていない。そして、最初に小箱を開けた時に朝日が射しこんで来るという、原作の二度目の描写を先取りしている。つまり、一見すると創作的に付加されたと思われた鷗外訳の朝日のシーンは、鷗外が勝手気ままに付加した文言ではない、ということになる。

それでは、なぜ鷗外訳でこのような先取りが見られたのか。もし鷗外が意図的に変更の手を加えたのだとしたら、敢えて(翻訳としての忠実性を捨象してまで)朝日が射しこむ描写を小箱を開けるシーンに移し替えるべき何らかの合理的な理由があった筈である。

物語では、男が宝石箱を押し付けるように小間使いの女性に渡したのは夜間である。彼女は翌朝になって、前夜の一件を主人スキュデリに報告する。小間使いが小箱をスキュデリに渡すのはまだ早朝の時間帯であり、しかも原作では、小箱を開けるシーンの後に、それに添えられたスキュデリ宛ての手紙(紙片)をスキュデリが読んで驚愕する場面が長く続く。そうこうするうちに朝の光が強くなり、カーテンの合間から光が差し込んで、テーブルに置かれた

⁴ 引用は『鷗外全集』第1巻(岩波書店、1971年)により、引用箇所(ページ)を本文中に括弧にくくって示す。なお引用に際し、筆者の使用するパソコンソフトの制約上、旧漢字や旧仮名を再現しきれなかった場合がある。また原文ではカタカナの固有名詞に傍線が引かれている部分があるが、本論文での引用に際して傍線は省略した。

⁵ 点線アンダーラインは筆者が強調の為に付したもので、原典には付されていない。本論文では、他の引用部分においても、鷗外訳と原文・現代訳が相違する部分に、適宜筆者が点線アンダーラインを引いた。

⁶ E.T.A. Hoffmann, *Das Fräulein von Scuderi*, in: ders. *Werke, ausgewählte Erzählungen*, Bd.I. Leipzig, Verlag des Bibliographischen Instituts. o.J.(刊行年無記)。本論文においては東京大学総合図書館鷗外文庫より取り寄せたコピーを使用した。

⁷ E.T.A.ホフマン(深田甫訳)「マドモワゼル・ドゥ・スキュデリ」(『ホフマン全集』第5巻I〔創土社、1990年〕に所収)。

宝石が輝いた、という場面につながる。小箱を開けた時から、朝日が射し込むまで時間の経過があったこと、つまり主人公が手紙を読んであれこれ考える時間があったことを描くのが原作の作りであって、これを鷗外訳のように、最初から朝日が射すように変更しては、時間の経過が伺えない。このことから考えると、鷗外が原作の構成を敢えて（即ち意図的・自覚的に）変更する合理的な理由はない、と言える。

とすると、鷗外が自覚的な形でない状態で変更を為した、との推測が一つの可能性として残る。その推測とは、鷗外が原文を、いわば独和対訳のように翻訳したのではなく、小箱を開けるシーンから手紙の場面、そして小箱に朝日が当たる叙述までのひとまとまりを通読し、それを頭の中に入れ、その記憶に基づいて自らの訳文を構成し直したのではないか、というものである。そして、記憶の中で少々の混乱が生じ、原文の後ろの叙述を訳文の前の方に取り込んだ、ということが一つの推測として成り立つのではないか。

以下に、同様の例——即ち原文では後ろの方に書かれていることが、鷗外訳では前の方に先取りの形で訳されている例——を検討する。

物語のかなり後ろの方である。小箱の中の装飾品は、当代きっての飾職であるカルディヤック親方の作品であることが分かり、小箱をスクデリに押し付けるように渡したのは、親方宅に住み込む徒弟の青年であったことも判明する。実はこの親方こそが連続宝石強盗殺人事件の真犯人である——自分が作った宝飾品に自己陶酔的な執着心を持つ親方は、宝飾品の買主からその品を自分の元に取り戻したい衝動を抑えきれず、ついには強盗殺人を犯してしまう——ということが物語の中盤から終盤で明らかになるが、そのことを当人以外には、まだ徒弟の青年しか知らない、という段階の場面である。親方は犯行に至る経緯等を、問わず語りに全て青年に打ち明ける。そして、犯行の為に夜間にどのようにして他人に気付かれぬよう家から外に出たか——親方は共同住宅に住んでいるから、普通に外に出たとすると、古い大きな玄関ドアを開けねばならず、その際大きな音が響いて、他の住人に気付かれてしまう——を述懐するという場面がある。実は親方の部屋には、外の塀に直接通じる秘密の通路があり、そこを通過して、石塀の一部の、これも秘密の回転仕掛けを利用して通りに出られる構造になっていると、親方が述べる。その鷗外訳は次のようになっている。

石垣の傍の鐵の棒を横へ引くと、石が勝手に廻る。これが丁度外の石の像に當る處だから、石に附いて廻つて外へ出ることが出来るが、常は石像の爲めに圍りの界が知れない。
(p. 137)

石造りの塀の外側には、塀の表面を装飾する為に幾つかの石像がしつらえてある。その内の一つが回転式になっていて、内側から外の道路側に出ることが出来る。鷗外訳では、このような石像の仕掛けの説明が詳しく為されている。親方は、この石像の回転扉を通過して、共同住宅の誰にも気付かれないうちに、外に出ることが出来る、というわけである。こうした回転扉の叙述が、実は原文では鷗外訳と少し異なる。以下に当該部分の現代訳を示し、原文は脚注に示す⁸。

現代訳：するとたちまち、塀の一部が回転しはじめ、その隙間からなら人間ひとりぐらいはすりとくぐり抜けて、往来に出られるという細工になってたのさね。（p. 369）

一見すると、鷗外訳と変わりはないようだが、よく読むと原文には石像の説明がない。塀が回転することは分るが、それが塀を飾る石像の部分であることは、この段階では明かされていない。鷗外訳では、それがはっきり書かれているわけだが、それでは石像云々の叙述が鷗外の勝手気ままな創作的付加であるかということ、実はそうではない。原作では、上記の回転塀の説明の後しばらくは、親方の部屋に秘密の通路がある理由、そして親方がこの部屋に転入する前からこの秘密の仕掛けが存在した事情の説明が続き、最後にまた、この回転塀の仕掛けの説明に戻っている。そして原作では、この段階で初めて、石像の説明が出て来る⁹。

現代訳：あれは木の細工で、外側だけがモルタル仕上げで水漆喰かなんぞの塗料がかぶ

⁸ 原文：... und alsbald drehte sich ein Stück Mauer los, so daß ein Mensch bequem durch die Oeffnung schlüpfen und auf die Straße gelangen konnte. (S.142)

⁹ 原文：Es ist ein Stück Holz, nur von außen gemörtelt und getüncht, in das von außenher eine Bildsäule, auch nur von Holz, doch ganz wie Stein, eingefügt ist, welches sich mit sammt der Bildsäule auf verborgenen Angeln dreht. (S.142)。

せてあるんだが、あれには、これもまた木製だが、石像そっくりに見える彫像が、外側から嵌めこんである。あの部分は、その彫像と一緒に、隠された蝶番で回転するようになっているのさ。」(p. 369)

鷗外は翻訳に際し、あらかじめこの部分まで目を通し、それを記憶に留めた上で、前の方の回転扉の説明の所に先取りして訳出したものとの推測が成り立つ。その際、問題の石像が実は木製であったとの原作の叙述が記憶から消え、単に回転仕掛けのからくりの説明の方に神経が集中したということも推測し得る。

3 先取り翻訳による結末露呈現象

原文の後ろの箇所に出て来る文言を、翻訳で先に出してしまうことによって、結末や成り行きが露呈する現象——俗に言う「ネタバレ」が生じている場合もある。

最初に紹介する例は、物語の発端部分、夜更けにスキュデリの館の戸口を激しく叩き、大声で扉を開けるように怒鳴る声がある場面である。この場面は、鷗外訳では次のようになっている。

戸を敲く音は段々劇しく成つて、それに時々男の聲で、早く此處を開けて下さい、後生だから(p. 103)

ここでは、謎の人物が男性であることが示されている。ところがこの箇所の現代訳を確認すると、「そのあいだにも、叩く音は相変わらず落雷のごとく響きつづけていたが、気がつくと、その合間あいまに怒鳴る声が聞こえるようであった、『どうか開けてください、お願いします、開けてください！』」(p. 280)となっていて¹⁰、物語の冒頭では声の主が男性なのか女性なのか、敢えてはっきりさせていないことが分かる。もちろん、そのすぐ後の文でこの声の主が男性であることが分かるのだが¹¹、鷗外の訳は、原文より早い段階で謎の人物の種明かしをしている。つまり原文では、まず「声」とのみ記し、その主が男性なのか女性なのか分からない描写で始まり、次いでその声の主が男性であることが分かるという、二段階の描写になって、読者が謎解きをしながら次の描写に進むような構造になっている。そこを、鷗外訳では初めから種明かしをしているわけである。

同様の例を挙げる。物語の中盤、宝石を携えた人物が愛人の元に通う、まさにその時に襲われるシーンである。襲われる直前、一人の男が何の警戒心もなく夜道を歩く場面が、鷗外訳では次のようになっている。

程なく小歌を謠ひ乍ら來たは、一人の士官と見えて、鏐の尖から下げた鳥の羽は薄明で善く見え、靴に附いて居る拍車の音は、澄み渡つて聞えました」(p.130)

鷗外訳では、この人物が「士官」であることが記されている。ところが、原文では、ここが単に *ein Mann*「一人の男」としか記されていない¹²。もちろん、この人物は兜を冠り、拍車のついた靴を履いていることから、軍人であることは容易に想像出来るが、少なくとも翻訳という観点からすると、鷗外訳は原文の当該箇所でない説明を施した訳になっている。実は原文では、後ろの方に、この人物が襲撃され、遺体のそばに *ein Offizierhut*「将校帽」が転がっていた、という表現があり¹³、鷗外はこの *Offizier* の部分を先んじて自己の訳文の中に取り入れていたことが推測し得る。

以上の二例は、原文の後ろの方に出て来る語彙を、鷗外が自己の訳文の前の方で先取りして活用した例であるが、それとは異なり、原文の後ろの方の特定の文章なり語彙なりを先

¹⁰ 原文: *Unterdessen donnerten die Schläge immer fort, und es war ihr, als rufe eine Stimme dazwischen: So macht doch nur auf um Christuswillen, so macht doch nur auf!* (S.102)。

¹¹ 原文で *die Stimme des Anpochenden* (S.102)という表現が直後に出て来る。現代訳では「扉を叩いているものの声」(p.280)となっていて、男性であるかどうかは、訳でははっきりしないが、原文の *des Anpochenden* は *der Anpochende* という——動詞 *anpochen* の現在分詞形容詞の名詞化の——男性形 2 格であるから、この時点でドイツ語文の読者は、声の主が男性であることが分かる。

¹² 原文: *Nicht lange dauert's, so kommt singend und trillerirend ein Mann daher mit leuchtendem Federbusch und klirrenden Sporen.* (S.137) 現代訳: それからほどなくして、ひとりの男が歌やトリルを口ずさみながら向こうからやってきます。羽飾りをびかびか光らせ、ブーツの拍車をがちゃがちゃいわせて歩いてくるのです(pp.356-357)。

¹³ 原文の S.138、現代訳の p.358 を参照。なおこの部分の鷗外訳は「士官の鏐」となっている(p.131)。

行して訳出したとは言えない例——即ち、原文の後ろの方で書かれていることの全体を、鷗外がかいつまんだ形で訳文の前の方で紹介した例——を挙げる。

その一つは、上に紹介した将校が襲われたのと同じ場面である。将校が襲撃されるのを目撃したのは、親方の元に住み込みで働いていた徒弟の青年である。青年は親方の娘と恋仲になり、それが親方に知れて破門されていたが、娘を恋しく思うあまり、夜に親方や娘の住む共同住宅のあたりをうろうろしていた。すると、住宅を囲む塀の一部が突然回転し、中から親方が出て来て、そのまま夜の道を歩き始めた。不審に思い青年が後をつけて行くと、夜道を歩いていた将校を親方が襲撃する場に遭遇する。鷗外訳では、目撃の様子を語る青年の述懐の中に次のような言葉がある。

主人は死に掛った士官の上に俯伏して、何かして居る様で御坐りました。(pp.130-131)

原文では、親方(カルディヤック)が将校を襲撃して、なおも倒れた男の体に馬乗りになる、という描写がある¹⁴。鷗外は、更にそのあとで「何かして居る様で」という、原文にない描写を付け加えている。ここが問題である。

原文では、この襲撃直後の場面で、単に襲撃したことが記されているのみであり、それが遺恨の故なのか、それとも強盗の為なのか、書かれていない。それは当然のことで、この場面を目撃した青年は、まさか親方が連続宝石強盗殺人事件の真犯人であろうなどとは想像だにしていなかったのであり、そうである以上、読者もこの時点では、親方が何の為に将校を襲撃したのか分る筈もない。それが鷗外訳では「何かして居る様で」と、強盗を示唆するような——つまりは結論を先取りするような——描写を書き加えているわけである。

それでは、鷗外が原文の後ろの方にある特定の文章——死体から何かを取る等のしぐさを描写した文章——を先取りして前の方で訳出したのかということ、そうではない。原文で記されているのは、青年に目撃されたことに気付いた親方がその場を逃げ去り、直後に騎馬憲兵隊が現場に駆けつけて、これが例の殺人鬼による犯行であると推測する、という情景が記されているが、親方が死体に何かの働きかけを為したとの叙述はない。読者は、騎馬憲兵隊が駆けつけて犯人を推測するという一連の流れから、親方こそが連続宝石強盗の単独犯であることを読み取れる——即ち親方が死体から宝石を奪い取るという行為に及んだと推測し得る——わけである。鷗外訳ではあたかも、後ろまで読んだ読者が、初めて読む別の読者に対して、思わず知らず種明かしを伝えてしまったかのように、親方の襲撃が、実は宝石強奪という行為を含んでいたことを示唆した訳文を為したのである。

もう一つ、やはり原文で後ろに出て来る特定の文章や語彙を先取りして訳したのでなく、後出の状況全体を概括的に把握した上で、訳者としてというより読者としての鷗外が、その状況に対する感慨めいたものを訳文の前の方で盛り込んだと目される例がある。

それは、物語の終盤である。上記の襲撃事件の後、親方は更に別の襲撃を行うが、その際返り討ちにあって瀕死の重傷を負う。今回もそれを目撃した徒弟は、瀕死の親方を肩に担いで共同住宅まで連れ帰る。親方はそのまま死を迎えるが、夜が明けると近隣の人々が親方の死に気付き、青年は親方殺しの犯人として誤認逮捕されてしまう。その後、世間の人々も裁判所も、状況証拠から徒弟の青年こそが真犯人であると固く信じるが、スキュデリのみが青年は無実であると確信し、裁判所(シャンプル・アルダント)の長官ラ・レニ(鷗外訳では「レニイ」)の元に談判に行く。その場面が、鷗外訳では次のようになっている(以下の引用で「女學士」とはスキュデリ、「役頭」とはレニ長官を指す)。

勉めてレニイが鈍い、情性の強い情感を動さうとしてあつた。是れは女學士がまだ彼の「シャンプル、アルダント」の役頭を善く知らなかつたのだ。(p.143)

裁判所の長官は、青年こそが真犯人であると頑なに信じてやまない。その頑迷ぶりを鷗外訳では「鈍い、情性の強い情感」と表現していて、この部分も実は原文と少し違うのであるが、本論文のテーマからは外れるので、ここでは論じないとして、問題なのは、青年が真犯人であると信じる長官の考えを動かそうとするスキュデリについて「是れは女學士がまだ彼の「シャンプル、アルダント」の役頭を善く知らなかつたのだ」と記している点である。実はこれは原

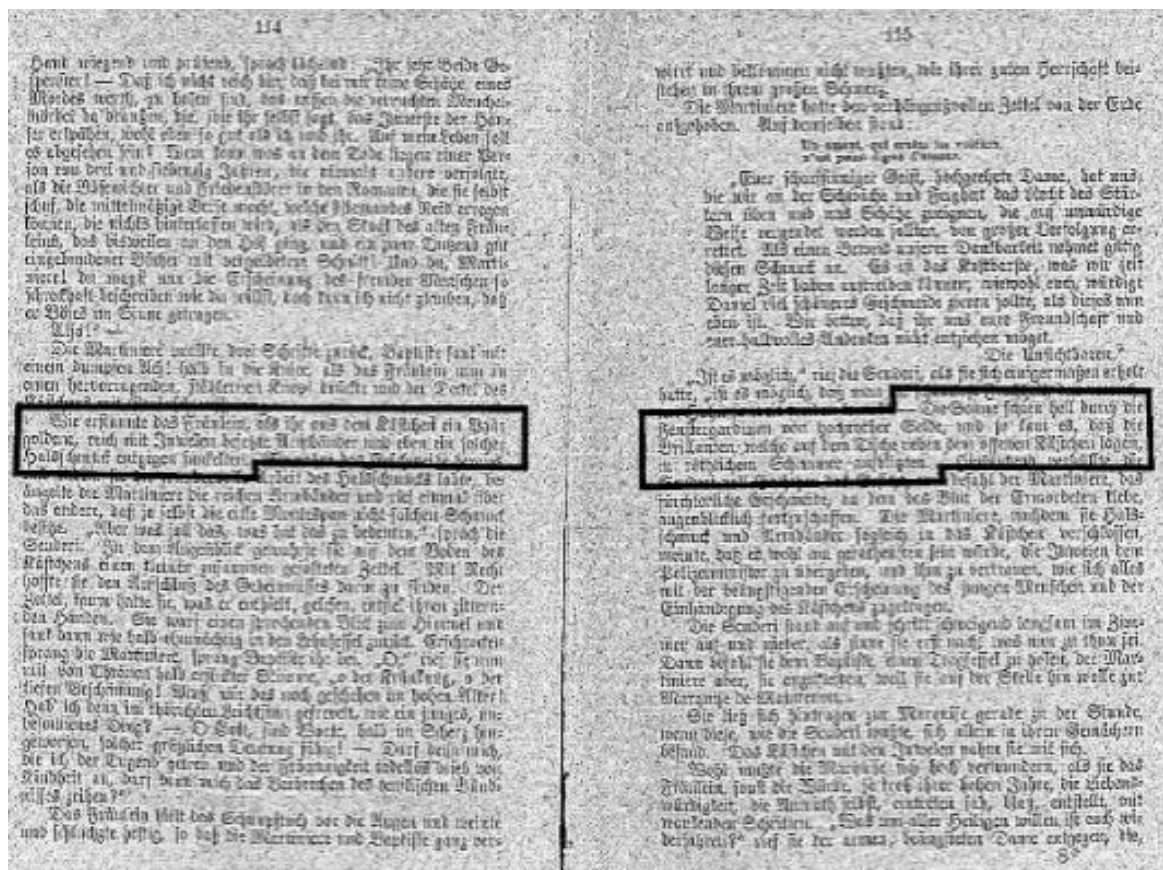
¹⁴ 原文: Cardillac ist über den Mann, der zu Boden liegt, her. (S.137)、現代訳: カルディヤックは、地面に横たわっている男の上に、なおも覆いかぶさるようにするのです(p.357)。

文にない、鷗外の創作的な付加である。鷗外の付加を読めば、読者は、スキュデリの働きかけが功を奏さなかったこと、そしてそれが長官の頑迷な人間性の故である、ということを感じ取るであろう。だが、原文では、スキュデリが長官に対し、非常なる熱意をもって説得に当たったとは書かれているが¹⁵、それが功を奏したかどうかについては——この段階では——書かれていない。原作のこの後の部分では、スキュデリの説得に対して長官が一つ一つ反論し、その際慰撫ではあるが、冷静かつ冷酷とも言える態度で青年を断罪する。鷗外訳においては、こうした原作の描写を、いわば「後の部分を読んだ読者の目で、前の部分にネタバレ的な感想を述べる」ような文章を訳文の中に盛り込んでしまったかのように見える。

4 「まとめ読み」の範囲

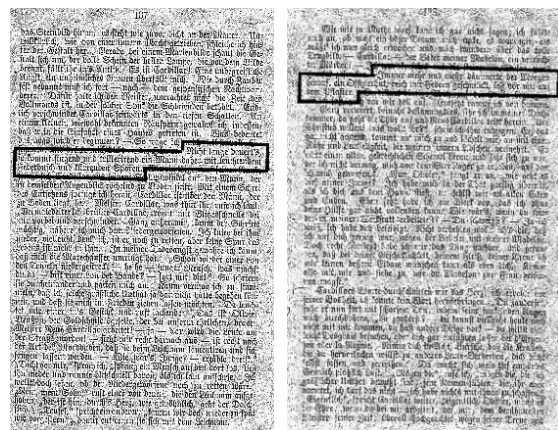
もし前節までに述べた仮定が正しいとすると、鷗外はどれくらいの分量を「まとめ読み」していたのか。

本論文第2節で取り挙げた、朝日が宝石に当たるシーンの場合、仮に鷗外が原文を読んだ際に、最初に小箱を開ける部分から、次に朝日が射しこむシーンまでをまとめて読んだとすると、それは鷗外文庫所収の原文——つまり鷗外がまさに読んだもの——では、下図のようになる。図版の左ページ(原文 S.114)の囲った部分が最初に小箱を開けるシーン、右の囲った部分(原文 S.115)が宝石に朝日が射すシーンで、間に手紙をめぐる文章が記されている。小箱を開けるシーンから、次の朝日のシーンまで、原文では約1ページ分の間隔がある。相当に長い分量を一気に頭の中に入れたのか、あるいは本論文次節で述べるように、ドイツ留学中の読書の際の遠き記憶の中で、朝日が宝石に当たるシーンが鷗外の心に強い印象を残した可能性もある。



¹⁵ 原文: Alles, was glühender Eifer, was geistvolle Beredsamkeit vermag, hatte die Scuderi aufgeboten, la Regnie's hartes Herz zu erweichen. (S.147f.), 現代訳: スキュデリとしては、ラ・レニの頑なな心を和らげるため、燃える熱意と才気ある弁舌をかたむけて、できることをすべてぶちまけたのであった(p.382)。

もう一つ、本論文第3節で検討した、襲われた人間が原文で最初は「男」としか書かれていなくて、後にそれが将校である（「将校帽」という表現を使用していた）という部分についても、同様に原文では約1ページの開きがある。右図の左側（原文 S.137）の囲った部分が、「一人の男」が登場する場面で、右側（原文 S.138）が、襲撃された後の描写で、死体のそばに「将校帽」が転がっていたという文章の部分である。ひょっとしたら、鷗外はこれだけの分量をまとめて概括的に把握し、それを記憶に留めた上で、記憶に基づいて原文の諸々の要素を訳文に再構成したのかも知れない。



5 鷗外の翻訳における短期的記憶と長期的記憶

鷗外訳の中に散見される「先取り翻訳」の基底にあるのは、通読に際する記憶力であるが、この場合の「記憶」には二種類あるように思われる。

一つは、翻訳の筆を執る時に原文を通読する、まさにその際の記憶である。現に机の前に原書を置いて、翻訳作業の為にドイツ語テキストを読み、頭の中に入れる。その場合の記憶は、「短期的記憶」と言える。

鷗外の翻訳流儀を検討する際、実はもう一つの記憶——「長期的記憶」と呼べるもの——についても考慮に入れねばならない。鷗外は、訳出作業に当たる際に初めてドイツ語文を読んだといったケースは希少で、それ以前のドイツ留学時代に、徒然の慰みにレクラム文庫等で手あたり次第に文学作品を読んでいて、そうした最初の読書の際の記憶も、帰国してからの訳出作業にある程度の影響を及ぼしたのではないかと目される。

時を隔てた二度の読書の実態を示すものとして、「玉を懐いて罪あり」とほぼ同時期に訳出を行った別の翻訳作品「悪因縁」において、実際に鷗外所蔵の原書への書き込み記録にそれが伺える。そのことについては、すでに別稿において論じたことがあるので¹⁶、ここではその概略を述べるに留める。鷗外の旧蔵書のドイツ語原書の中には、ドイツ留学中に読書を行ったことを示す日付の記入及び簡単な感想（おもに漢文形式）と、実際に翻訳を行った時の初出誌の分割掲載の回数を示す数字の書き込みの二種の記入があり、このことから鷗外が留学中と帰国後の訳出作業の時の合計二回（あるいはそれ以上）、原書を読んだことが示されている。

「玉を懐いて罪あり」に関して言えば、原書への数字の書き込み（単に区切りを示す鍵括弧状の印のみの場合もある）が見られ、それらは初出である『讀賣新聞』に全十四回にわたって分割掲載された際の切れ目と一致する。また感想の書き込みと見られる（かなり判読困難な）文字の記入も見られる。但し、読書を行った日付の書き込みはないので、ドイツ留学中に原作 *Das Fräulein von Scuderi* を読んだという直接の証拠は、残念ながら得られない。

従って、あくまでも仮定の話になるが、鷗外が「悪因縁」の原作 *Die Verlobung in St. Domingo* の場合と同様、すでにドイツ留学中に *Das Fräulein von Scuderi* を読んでいたとすれば、その際の記憶も、実際に訳出作業を行う際に、何らかの影響を及ぼしたのではないかとと思われる。たとえば——これも仮定の話にすぎないが——宝石箱に朝日が当たるシーンについて、鷗外がドイツ留学時に読書した際に、朝日に宝石が煌めくシーンが、いわば視覚的イメージのように記憶の片隅に残り、実際に訳出を行った際にその記憶がよみがえって、宝石箱を開ける最初のシーンに——原作ではここで朝日が宝石に当たる描写はないにも拘わらず——自己の訳文の前の方の部分に長期的記憶に基づいて書き込んでしまった、と考えることも可能ではないか。

¹⁶ 拙論「鷗外訳「悪因縁」と翻訳原本——訳者による削除と付加をめぐって」（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 言語文化の比較と交流』第12号 2019年5月）を参照。

6 誤訳のメカニズム

およそ誤訳を為してしまう原因として、原文の難解な部分について、その語法や文法構造に理解が行き届かなかった場合や、あるいは作品の背景に対する知識が不足していた等の理由が考えられる。外国語初学者ならいざ知らず、プロの翻訳家が犯す誤訳は、要は「難しい所を間違える」ということに帰着する。

鷗外の場合は、そうではない。間違える筈のない、語学的に難解でも何でもないごく普通の箇所——時に初学者でさえ間違えないような箇所——に不可解なミスが見られるのである。

以下にその例を挙げて行くが、前節までに見た「先取り翻訳」の場合と同様、「玉を懷いて罪あり」に見られる誤訳は、記憶に基づいて訳文を構成するという鷗外独自の翻訳流儀に由来することが分かる。そしてそれらの多くは、短期的な記憶の際に生じた思わぬ単純ミスに由来するものであったと推測されるが、中には長期的な記憶が鷗外の錯誤の引き金となったと思われるものもある。

原作の冒頭で、謎の男が夜間にスキュデリ宅に押し入り、小箱を押し付けるように渡す、という場面があった。その翌日、小箱の中に豪華な宝石をあしらった装飾品を発見したスキュデリは、王の愛妃である侯爵夫人の所に相談に行く。装飾品を一目見ただけで侯爵夫人は、この作品が当代随一の名人であるカルディヤック親方の手によるものであると見抜く。それを受けてスキュデリが、早速親方と会いたいと申し述べる場面が続く。この箇所の鷗外訳は、次のようになっている。（訳文の「マドレエヌ」はスキュデリのことを指す。）

マドレエヌは（……）今から往つてカルヂリヤツクに遭はうと云ふと、夫人は止めた。なに私も様子が知りたいから、飾職を此處へ呼びませう。又た指環のことだと思ふと来ませんから、誂へ物ではない、鑑定を頼むのだと、使に善く云つて遣りませう。（p. 111）

この訳によれば、飾職の親方に会いたいとスキュデリが述べると、それを受けて、こちらから会いに行くのではなくて親方を呼び寄せる、しかも装飾品製作の依頼ではなくて、宝石の鑑定を頼むという口実にするのがよいと、侯爵夫人がアイデアを述べる、ということになっている。

ところが原文では、宝石鑑定の依頼をするようにとのアイデアを出すのはスキュデリ自身であり、そのアイデアについて、侯爵夫人が賛成する、という内容になっている。

原文：Die Scuderi, (...) meinte, daß man dem Meister Sonderling ja gleich sagen lassen könne, wie man keine Arbeit, sondern nur sein Urtheil über Juwelen verlange. Das billigte die Marquise. (S.118)

現代訳：スキュデリは（……）それならすぐに使いのかたにいつていただき、あの変わりものの親方には、仕事のことでなく宝石の鑑定だけをお願いしたい、そう伝えるようにしていただいたら、と意見を述べた。侯爵夫人もその意見に同意した。（p. 314）

原文では、文章をはっきり二つに分かれ、最初の文章の主語は Scuderi であり、次の文章の主語は Marquise である。このことは、ドイツ語初学者であっても一目瞭然で、この両文章を一体のものとして理解することは、普通では考えられない。つまり鷗外訳は普通ではありえない、「不可解な誤訳」であると評される。

こうした不可解さの所以は、上に述べた推測、即ち鷗外が記憶に基づいて訳文を再構成した、という考え方からすると、あり得る混乱であったと思われる。つまり原文をかなりの速読でまとめ読みして、その後一気に訳文を作成した、という翻訳流儀に由来する混乱が見られたのではなかったか。

別の例でも、このようなまとめ読みが原因であると思われる誤訳（というより再構成ミス）が見られる。

上にも紹介したように、物語の冒頭で、謎の男が小箱を押し付けるようにして小間使いに渡す場面があるが、その翌朝になって、スキュデリ（下記鷗外訳では「女學士」）が小箱を開けようとする、と見ていた小間使いの女性と玄關番の男性が、怖がって二人とも後ろに下がる、という描写がある。

どれ、筐を。と開け掛けた女學士の平氣な様子に引き代へて、下女、下男は覺えず三足程後へ下つた（p. 109）

だが、原文では——細かな違いだが——三步下がるのは小間使いのみであり、玄関番は「あっ」と叫んで膝をつきそうになるという、別の行動を取っている¹⁷。つまり鷗外訳では、それが混同されている。

この物語において、小間使いも玄関番も、いわば脇役としての小さな位置づけしか有さぬ存在であり、驚いて三步下がるのが一人であろうと、二人であろうと、物語の進行に関しては、殆ど何の影響もない。このような箇所、鷗外が原文を斜め読みして、記憶が曖昧なままに翻訳の筆を進めたということは、想像し得る事柄であろう。

同様に、物語の進行に関して、大きな影響を与えぬ細かな所で、鷗外の翻訳が原作から外れている場合がある。それは、事件の調査を行っている裁判所長官の言葉の中にある。長官は、殺害された飾職のカルディヤック親方の行動を調査し、その過程で親方の住む共同住宅の他の住人を調べる。その中に、もう一人別の親方がいた。その人物に関する調査の具合を語る長官の言葉が、鷗外訳では次のように記されている。

カルデリヤックの住つて居る家の大戸口の側に、クロオド、パトリユウといふ老人が夫婦暮して居ますが (p. 118)

ごく短い文章だが、ここで注意したいポイントは二つあり、第一はもう一人の親方（パトリユウ）が老人であって、夫婦で暮らしているということ、第二は妻の具体的な年齢が書かれていない、という点である。この部分の原作を確認すると次のようになっている¹⁸。

現代訳：さていちばん下の階には、ということは玄関のすぐわきということになりますが、ここに住んでいるのが年寄りの親方クロード・パトリユで、手伝いの女中、といつても八十にはなろうかという年齢ですが、いまでもって元気豊饒かいくしゃくぴんぴんしている女と暮らしているのです (pp. 334-335)

原文では、老人は夫婦で暮らしているのではなく、女中と暮らしていて、この女性が八十才近い年齢であると記されている。つまり二つのポイントにおいて、原作と鷗外訳は異なっている。

老人と八十才の女中を夫婦と訳したことが、誤訳なのか、意図的改変なのかは、判断に迷う所である。鷗外が記憶に基づく翻訳を為した、と主張する本論文においては、老人と女中との二人暮らしを、老夫婦ととらえた鷗外訳は、記憶違いによる誤訳であるという可能性をまず考えるべきであろう。しかし、実は鷗外訳には、本論文では紙幅の都合で論じていないが、明治の読者を意識して、原作の男女関係や女性の社会的役割について、意図的に改変したと思しき箇所も散見される。そのことから、「女中と暮らす老人」を「老夫婦」と訳した鷗外訳が、記憶違いに基づく誤訳ではなく、西洋文学原作の男女関係を、明治の読者の許容範囲を考慮して意図的に改変したという可能性も排除出来ない。

第二の点、即ち原作で女中が八十才を越えるとしている点については、鷗外訳の別の箇所に、老人の方を八十才であるとしている訳文がある。

パトリユウは最う八十に成つて居て、眠られぬ癖があるから、 (p. 118)

原文では、鷗外の上記の訳に相当する部分において（そしてそれ以外の部分でも）老人の具体的な年齢についての記載はなく¹⁹、鷗外が老人の年齢を八十才と訳したのは、老女中の年齢の八十才という原作の記載を、記憶の中で混乱させたまま、男性の方の年齢であると訳出してしまったものと考えられる。つまり、年齢の取り違えのミスは、普通に言う「誤訳」の次元とは異なり、記憶の混乱ないし錯誤の次元のミスである。

以上は、短期的な記憶の際に見られた混乱に由来する誤訳の例と目されるが、最後に紹介するのは、長期的な記憶が鷗外の中で一つの先入観となって生じたミスと思われる例である。

¹⁷ 原文：„Also“ —— / Die Martiniere prallte drei Schritte zurück, Baptiste sank mit einem dumpfen Ach! halb in die Kniee (sic!), (S.114)、現代訳：「それじゃ開けてみますよ！」 / マルティニエールが三步うしろに飛び退き、バプティストが「あっ！」と低く呻いて膝をつきそうになった (p. 304)。引用文中の Martiniere (マルティニエール) は小間使いの女性、Baptiste (バプティスト) は玄関番の男性を指す。

¹⁸ 原文：Nun wohnt in dem untersten Stock, also dicht neben der Hausthüre, der alte Meister Claude Patru mit seiner Aufwärterin, einer Person von beinahe achtzig Jahren, aber noch munter und rührig. (S.128)。

¹⁹ 原文：Meister Claude leidet an Schlaflosigkeit, wie es alten Leuten wohl zu gehen pflegt. (S.128)、現代訳：クロード親方は、年取ったかたにはありがちなことですが、不眠症にかかってましてね (p. 335)。

鷗外訳の中に、スキュデリの元に、彼女の作品を求めて朝から次々に客が来訪する、という叙述がある。

スキュデリイ學士は既に其翌朝飾を持つて、カルヂリヤツクの宅まで往かうと思つたが、生憎と詩歌を求めるものが多く、彼此とする内に、眞晝近くなり、(p. 114)

謎の小箱の中に入っていた装身具を、その作者であるカルヂリヤツクに至急返却する必要に迫られたスキュデリが、いざ出かけようとする、と、来客が彼女の詩文を求めて殺到して来る、という叙述である。主人公スキュデリは、本論文冒頭で紹介したように、ルイ十四世の宮廷に出入りする詩人であり作家であつた。従つて、上の鷗外訳を見て読者は何の不思議も感じないであろうが、実は原文では、来客がスキュデリの詩文を求めて来るのではなく、客が自作の詩文を携えてスキュデリの元を訪ねる——つまり、高名な詩人に批評や校閲を求めに来る——ということになっている²⁰。鷗外はそれを逆に把握したことが分かる。

この例も、原文の主語を取り違える筈のない箇所であり、いわゆる誤訳というよりは記憶ミスに由来するものであり、かつ、短期的記憶の混乱の可能性の外に、長期的記憶による混乱の可能性もある。即ち、鷗外がこの作品を最初に読んだ時以来の「スキュデリは宮廷に出入りする高名な詩人・作家である」という記憶が一つの先入観となり、この先入観に従つて鷗外は、主人公の元に詩文を求めて来客が殺到するという、原文とは逆の訳文を作成してしまったのではないか。

7 錯誤の連鎖とその解消

まとめ読みと記憶に基づく訳文作成という翻訳流儀に由来する誤訳も、前節の前半で検討した例のように、脇役的登場人物に関するものである場合は、よしや鷗外訳に原作との乖離が見られたとしても、物語の全体的展開を理解する際の支障とはなりにくい。従つて読者は鷗外訳を読んで、何の違和感もなく先に読み進めることが出来る。

ところが、物語の主要人物に関する部分で、記憶ミスによる誤訳が存在した場合、読者は多少とも混乱を覚えることとなる。

スキュデリの物語の主要な登場人物に、オリヴィエなる青年がいる。この人物こそ、物語の冒頭において、スキュデリの館に押し入り、宝石の入った小箱を置き去った謎の男の正体であり、彼はまた、飾職のカルヂリヤツク親方の元で住み込みの徒弟として修業を始めた人物である。この青年が、親方殺しの犯人と誤認され、かつまた連続宝石強盗殺人事件の犯人として捕縛されるという事件があり、彼の無実を信じるのは世間でスキュデリのみとなる。スキュデリは青年の無実を証する為に奔走し、囚われの身の青年と面会する機会を得るが、面会した青年の口から意外な事実を知らされる。即ち、青年の母は、かつてスキュデリの元に引き取られた少女で、この少女が成人した後結婚して生まれたのが自分であり、自分も幼い頃スキュデリにあやしてもらった、というのである。青年が母アンヌのことを語る部分の鷗外訳は、しかし読者に混乱を与える。

アンヌ、ギオハと云婢は、小さい時からスキュデリイ家に仕へた女で、マドレエヌ女學士を吾子の様に膝の上に載せて育て上げたは渠だ。(p. 125)

ここでいう「マドレエヌ女學士」とはスキュデリのことであり、「渠」(かれ)とはここでは「彼女」の意であるから、鷗外訳によればスキュデリを膝の上であやした女性は、スキュデリにとって母親に近い年齢ということになる。そしてこの女性の子供が例の青年なのであるから、鷗外の訳文のままに理解を進めると、スキュデリと青年は、同世代同士という年齢関係になる。ところが実際には、諸々の宝石強盗殺人事件が起こった時にスキュデリは高齢であり、一方オリヴィエは青年なのであるから、読者は鷗外の訳文を見て混乱しかねない。鷗外が訳した上記の部分に相当する原文及び現代訳は次のようになっている。

²⁰ 鷗外訳の「生憎と詩歌を求めるものが多く」に相当するのは、以下の箇所である。原文：Doch war es, als hätten alle schönen Geister von ganz Paris sich verabredet, gerade an dem Morgen das Fräulein mit Versen, Schauspielen, Anekdoten zu bestürmen. (S. 123)、現代訳：パリじゅうの美的精神の持ち主たちがこぞって示し合わせたのではないかとおもわれるほど大勢のひとが、なんと朝からはやくも、詩だの、戯曲だの、逸話だのを携え、ぞくぞくとマドモワゼルを訪ねてきたのであつた (p. 323)。

原文 : Anne Guiot, die Tochter eines verarmten Bürgers, war von klein auf bei der Scuderi, die sie, wie die Mutter das liebe Kind, erzog mit aller Treue und Sorgfalt. (S.133)

現代訳 : アンヌ・ギュオと言われてみれば、貧困にあえぐはめになったある市民の娘で、幼いころからスキュデリのもとに引き取られ、母親がわが子を愛するように、スキュデリが真心こめ念を入れて育てたそのひとであった。(pp.347-348)

現代訳を見れば明らかなように、原文ではスキュデリがアンヌをわが子のように育てたのであって、アンヌがスキュデリを育てたのではない。

ドイツ語の文法を解説するならば、原文における Scuderi, die sie (...) erzog の部分の解釈が問題となる。文中の die は Scuderi を先行詞とする関係代名詞の女性形で、「～が」を表す形(1格)であり、一方 sie は Anne Guiot を受ける人称代名詞女性形で、「～を」を表す形(4格)である。純粋に外形からのみ言えば、die は 1 格(～が)とも 4 格(～を)とも取れ、同様に sie も 1 格(～が)とも 4 格(～を)とも取れる。もし die を 4 格(～を)、sie を 1 格(～が)と取れば、鷗外訳のようになる。外形上はどちらの解釈も可能であるから、鷗外の解釈も一応は成り立つ。しかし内容上、スキュデリにとって青年は孫のような年齢の存在であり、その母はスキュデリからすればわが娘くらいの年齢となる筈である。そのアンヌにスキュデリ自身が幼少の頃にあやされた、ということは現実ではあり得ない。従って、やはり die が主語 1 格で sie が目的語 4 格であると解釈するのが妥当となる。鷗外がそこを取り違えたということは、よほどの斜め読みをしたとしか考えられない。

鷗外の「誤訳」が、語学的な解釈ミスに由来するものというより、むしろ原作の登場人物の人間関係についての錯誤に基づくものである、という推測を裏付けるものがある。それは、人間関係の錯誤が、当該部分の後の訳文においても引き継がれている、という事実である。つまり、青年の母が幼少のスキュデリをわが子同然に愛したという錯誤が連鎖を為し、原文とは異なる人間関係がそのままに鷗外訳の中で続くことになる。言い換えれば、錯誤なりに整合性が取れた形の叙述になっているのである。たとえば、原文で上記引用文の直後に、スキュデリに育てられた「彼女」が成人して、求婚する男性が現れるという部分がある²¹。ここでの「彼女」は文脈から考えると当然アンヌになる筈の所、鷗外はその文脈自体を錯覚して把握しているから、これを、以下に示すように「女學士」(スキュデリ)と——錯誤なりに整合性を取って——訳文に反映せしめている。

女學士が大きく成った時に、誠實な美少年のクロオド、ブルツソンといふものが、この婢を貰ひ受けて女房にした。クロオドは上手な時計屋で、巴里の町で評判も善く、収入もあることだから、スキュデリ家でも喜んで結婚を賛成した(p.125)

本来なら、スキュデリが我が娘の如く愛したアンヌが成人し、そのアンヌに求婚する男性が現れ、その結婚にスキュデリが同意した、という話であるが、鷗外訳では、幼いスキュデリが成長した時、養母的なアンヌに求婚する男性が現れ、二人の結婚をスキュデリ家が(スキュデリ自身でなく)同意した、という風になっている。

さて、この錯誤はどこまで鷗外訳の中で続くのか。実は、鷗外訳のこれよりかなり進んだ所に、「兼て愛した召仕の一人息子」(p.143)と記されている。この箇所原文は Den Sohn ihrer geliebten Anne (S.147)であり、現代訳では「自分が大事におもっていたアンヌの息子」(p.380)となっている。鷗外訳の「兼て愛した」は、普通に考えれば「召仕」に掛かり、つまりはアンヌをスキュデリが愛したという、錯誤が解消された訳文になっている。「兼て愛した」が

²¹ 原文 ; Als sie nun herangewachsen, fand sich ein hübscher sittiger Jüngling, Claude Brußon geheißen, ein, der um das Mädchen warb. Da er nun ein grundgeschickter Uhrmacher war, der sein reichliches Brod in Paris finden mußte, Anne ihn auch herzlich lieb gewonnen hatte, so trug die Scuderi gar kein Bedenken, in die Heirat ihrer Pflgetochter zu willigen. (S.133)、現代訳 : こうしてアンヌが年頃になったとき、眉目秀麗で礼儀作法も心得た若者が現われたのだが、その名はクロード・ブリュソン、この若者はやがて少女に求婚することになった。若者は叩き上げられた腕の立つ時計職人で、これならパリでも裕福に稼いでいけるはずの人物であったし、アンヌのほうでも心から好意をもつようになっていたこととて、スキュデリはなんのためらいもなく、養ってきた娘の結婚にすすんで同意したのであった(p.348)。

「一人息子」に掛かる、という考え方も出来なくはないが、原文では、「彼女（即ちスキュデリ）に愛された」はアンヌに掛かるとしか解釈出来ないのでは、翻訳の観点から考えると、鷗外訳における「兼て愛した」は「召仕」に掛かるものという普通の解釈が妥当であると考えられる。

どうして錯誤が解消されたのか。これは、初出の発行時期と関係がありそうである。錯誤が見られた箇所は、初出『讀賣新聞』では第7回掲載部分に存在する²²。一方、錯誤の解消が見られるのは第12回掲載号である²³。全集版を見ただけでは分からないが、鷗外訳が分割掲載された初出紙を見ると、第7回では錯誤があり、かつそれが連鎖を為していたが、次にアンヌが登場する第12回では、原文を正しく訳していたことが分かる。

このことから更に、分割掲載に際しての鷗外の翻訳の実態も推測し得る。即ち鷗外は、「玉を懷いて罪あり」を『讀賣新聞』に分割掲載するに際し、掲載を行う都度一定の範囲を訳出するという手法を取ったと推測し得る。つまり鷗外は、全体の訳稿を完成させた上でそれを後に適宜分割して『讀賣新聞』の編集部門に回したのではないと思われる。

そしてその第7回（明治22年6月1日）の掲載分の訳文を作成する際に錯誤による翻訳ミスが生じたが、それから1ヵ月後に掲載された第12回（同7月3日）の部分の訳出する際には、以前の錯誤を引き継ぐことがなかった。

E. T. A. ホフマンのこの物語において、スキュデリと青年は非常に重要な位置を占める登場人物である。確かに青年の母は、この物語全体の中では重要な役割を果たしているわけではない。とはいえ、スキュデリとオリヴィエ青年という、物語の重要な登場人物二人をつなぐ役割を果たすという面では、読者の関心を一定程度惹きつけるような存在でもある。鷗外が、この人物についての原文の叙述をかなりの速読で把握し、その速読の過程において、思わぬミスが生じた可能性は高い。だがそれにしても、スキュデリにとって孫ほどの年齢差の存在である青年に関し、少なくとも『讀賣新聞』第7回掲載分では、その母親にスキュデリが幼児の頃に育てられたという奇妙な錯覚のままに鷗外訳が構成されているのであり、読者はかなり混乱するのではないか。またこのような錯誤が、初出である『讀賣新聞』に始まり、再掲である『水沫集』所収の版（そしてこれが岩波版『鷗外全集』の底本となっている）にも引き継がれていることから、鷗外が自己の翻訳である「玉を懷いて罪あり」の訳文を、再掲にあたって再度通読することはなく、ましてや原文と訳文を照らし合わせてチェックし直す等の作業も行っていなかったことが推測し得るのである。

8 小括

以上検討して来たように、鷗外の翻訳「玉を懷いて罪あり」は、逐語的に原文を把握してじっくりと翻訳作業を進めたというより、原文の数行ないし数十行をまとめて、かなりの速読で通読し、その内容の概略を大掴みに記憶に留め、その記憶に基づいて自己の訳文を、いわば再構成するという翻訳流儀に基づくものであったと推測される。その際、たまさか記憶の混乱が生じ、原文の後ろの方に書かれていた部分が鷗外訳で前の方に出て来る場合や、記憶ミスに基づくと見られる誤訳・錯誤が生じる場合があった。また鷗外における「記憶」には、翻訳作業の現場における短期的記憶の他に、ドイツ留学時における読書の際の遠き記憶、長期的記憶とも称し得るものの二種があったことも推測し得る。このような翻訳流儀は、鷗外の同時期の他の翻訳作品に比しても、特筆すべき特徴であると言える。

「玉を懷いて罪あり」に見られる鷗外の自由な翻訳ぶりは、単に意識した、あるいは抄訳した、という次元のものではなく、鷗外自身のまとめ読みと記憶に基づく、独自の翻訳流儀の所産であったと評し得るであろう。

²² 念の為に、以下に初出の文章を掲げる。岩波全集版と大きな差はないが、初出には句読点がなく、また総ルビであり、若干字句の違いがある。「アン、ギオーといふ婢ハ小さい時からスキュデリー家に仕へた女でマグダレーン女學士を吾子の様に膝の上へ載せて育て上げたのハ渠だ女學士がおほく成つた時に誠實な美少年のクロード、ブラツソンといふものがこの婢を貰ひ受けて女房にしたクロードハ上手な時計屋で巴里の町で評判も善く收穫もあることだからスキュデリー家でも喜んで結婚を賛成した」。（『讀賣新聞』附録、1889〔明治22〕年6月1日）。

²³ 初出「兼て愛した召仕ひの一人息子」。（『讀賣新聞』附録（1889〔明治22〕年7月3日））。